

国語

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、省略した箇所があります。)

ところが雑食動物のように知識をむしろ読みかじっていると、なかにはちょっとあやしいものも混ざっている。ここで注意しておく必要があるのが、「異文化」である。この単語を目にしたら、ピンと耳をたてて首をひっこめて、¹警戒の姿勢をとってみよう。

昔からよく、「文化が違う」という言いかたがされる。そして例としてよく、A、そういう衣食住の例が挙げられてきた。こうした生活様式の違いは確かに目につくし、明治期の作家の随筆などを読んでみると、そのようないわゆる「文化(衣食住)の違い」に戸惑ったという面白おかしいエピソードがたくさんでてる。

けれども日本の生活様式は、明治の文豪が留学した時代とつぶさに比べるまでもなく、すでにかなり西欧化している。

A することに戸惑う現代人はあまりいないだろうし、むしろ私たちが150年前の日本に住むことになった場合のほうがカルチャーショックは大きそうだ。

ところが、私が「外国に暮らしていた」と話すと、それだけで「文化の違いで困ったり驚いたりした体験はありますか」とか、「異文化交流のために心がけるべきことは」などという質問をされることがある。おそらく質問者にとっては「よく知らない場所だから、なにか違う文化があるのではないか」という想定からでた素朴な疑問だろうし、そう訊かれるとこちらもつい真面目に(なにかあったらどうか)と考えてしまいがちだ。ロシアならやはり寒いので防寒の知恵が浮かぶし、山岳地や砂漠にはそういう場所ならではの工夫がある。でもそれは文化というよりはむしろ自然や気候の問題で、ロシアと北海道とカナダで同じような防寒対策をしていたりもするわけだが、ここで訊かれているのはそういうことではなさそうだ。だとしたらこの「文化の違い」「異文化」とは、いったいなにを意味するのだろうか。

まず考えないといけないのは、「文化」ということにはあまりにも膨大な意味や解釈があつて、誰もが同じようにその語を理解しているわけではないということだ。

B 「あの人は文化的だ」という場合、芸術への造詣^{ぞうぎ}が深いとか、マナーや礼儀を重んじるとかいったことが念頭に置かれる。この場合の「文化」は歴史ある古い用いられたで、「文明」と語義が近い。いっぽう、国や民族とセットで用いられる「○○文化」の場合、特定の集団やグループに帰属あるいは由来するとされる独自の生活様式などがイメージされる。さらには

「C」のように現代社会の特徴を言い表すために「文化」が用いられることもある。さあ大変だ。ややこしくなってきたぞ。こういうときは学者先生の知恵を借りよう。ようし、その名も『文化とは何か』（大橋洋一訳、松柏社、2006年）という本を書いている、テリー・イーグルトン（1943）^①を呼んでみるぞ。イーグルトン先生、いかがですか。するとイーグルトンはふむふむ、とうなずいて答えてくれる——「肯定的なものと否定的なものとの両極の間で文化の概念は現在^②で動いている。（中略）だから文化観念の社会史は類のないほど錯綜^③し両面的なのである」。

つまり「文化」の定義はかなり混沌^④とした状況にあつて、イーグルトンはこの本のなかで「文化」という語が歴史のなかで担ってきた数多くの意味やニュアンスをひもとこうとしているのだ。でもそれら無数にある理解のうち私が大切に選びとっているのは、「文化とは、人と人がなにかしらの共通の様式を用いて理解しあうための営みである」という考えかただ。それは、「かつては^⑤合意の領域であつた文化がいまや闘争の領域へと変貌^⑥してしまつた——つまりは、理解しあう営みという最も重要な点がおろそかになつて、互いの違いを強調し優劣を決めたがるようになってしまつた現代において、文化をふたたび「合意の領域」にたちかえらせる考えかただからだ。音楽という芸術分野を思い描くとわかりやすい。人間は同じ楽器を^⑦ひいたり、いくつもの楽器を合わせて演奏したりすることによって音を生み出す。音楽をやる人にとつて、同じジャンルの音楽をやっている人というのは、当然ながら「共通の文化」を持つ人々である。ピアノならピアノの、チェロならチェロの音色のために技術^⑧をクシ^⑨し想い^⑩をこめ、よほど耳のいい人でないとわからないピミョウ^⑪な音の違いにも気づき、音によってわかりあう。もちろんそれをひとつの「文化」とみなすにあたつてはさまざまな条件がつく。

B、私の通つていた文学大学で20世紀のロシア文学を教えていたセルゲイ・フェジヤークン先生は、クラシック音楽の作曲家スクリャービン、ムソルグスキー、ラフマニノフの^⑫デンキを著していることでも知られる音楽マニアだが、あるとき授業にラフマニノフのピアノ曲『鐘』の音源を持つてきて、みんなに聴かせてくれた。そしてこの曲の音にロシア正教会の鐘の音が重ねられていることを解説し、さらにそれを念頭に置いて書かれた文学作品の話をして「これがわからないと読んでもわからないですからね」と説明した。つまり宗教的要素が音楽に、そして音楽が文学に、追加の要素として加わっているということだ。

すべての文化は多かれ少なかれ複合的なものだから、こんなふうに別の種類の文化がふまえられている例は珍しくない。けれどもそれらはあくまでも付加的な要素であつて、ひとつひとつの文化はその技術や知識を身につけた人々の共有する認識こそを大切に、^⑬「人と人が共通の様式を用いて理解しあう」という原点に基づき、日々刻々と姿を変えながら、より広く深い「理解」の方

向へと進むべきものである。

ここで最初の質問に戻つて、考えてみよう。私が外国に暮らしたという話から、質問者はなかば自動的に「異文化」という単語を導きだしてしまっている。これはすでに質問のたてかたがおかしいのである。「外国」と聞いてそれをすぐに「異文化」というイメージにつなげてしまう人がまず認識を改めなければいけないのは、「文化」の枠組みは場所で（ましてや国籍や民族で）決まるものではないということだ。

なぜこれにこだわるかという点、「異文化」という考えかたには前提として「自分の（属する）文化」というものが不可避免的に（しかも自ら選びとつたものではなく、生まれた国や民族に帰属させられるものとして）想定されていて、それはさきほど触れた国や民族の冠せられる「〇〇文化」と結びつき、簡単に排外的な姿勢（「異なる」ものに対する疎外や排除）につながってしまうからだ。

B、東京都教育委員会が2008年から配布している「日本の伝統・文化理解教育の推進」という資料がある。それによると「異文化を理解し大切にしようとする心は、自国の文化理解が基盤となつて、はぐくまれるもの」らしい。なんとも不可思議な説明だ。「異文化」の対義語がどうして「自文化」でも「自分の文化」でもなく「自国の文化」なのか。この「国」という概念はどこからなんのためにでてきたのか。こうした箇所に根拠なく暗黙の了解のように侵入してくる概念には、およそなんらかの支配的で扇動的な思惑がある。

この資料ではこれらについてなんの説明もないまま、七夕や三味線や茶道などいかににも日本の「伝統文化」の枠内で語られがちな例が挙げられていたすえに、「日本人としてのアイデンティティの確立」が唐突に「伝統・文化理解教育」の意義として示される。もちろんここで「伝統」「文化」として挙げられている諸文化にはなんの罪もない。けれども「異文化」と「自国の文化」の境界を明確に線引きし、特定の国籍の人々が属するものとするのは、あまりに強引であるばかりか、端的にいつて不正確である。七夕も三味線も茶道ももとは、いまの「日本」や「中国」といった国の概念のない時代に、ユーラシア大陸や琉球諸島といったほかの地域から伝わつてきた風習や楽器などが発展したものだ。

じゃあここでもうひとりの研究者、エドワード・サイード（1935～2003）を呼びだしてみよう。サイード先生、どうですか。サイードは言う——「いかなる文化も単一で純粹ではない。すべての文化は^⑭雑種^⑮のかつ異種^⑯混雑^⑰的で、異様なまでに差異化され、一枚岩的ではない」（『文化と帝国主義』1、大橋洋一訳、みすず書房、1998年）。つまり「文化」とはいろいろなもの

の混合物で、「異」だとかその逆に「純粹な」などという形容詞をつけるのは、撞着語法（つじつまのあわない単語の組み合わせ）なのだ。にもかかわらず「純粹」や「異」が主張されている場合、話者が意識的にせよ無意識的にせよなにかしらの「粹組み」を強めようとして、その粹組みの線引きに固執するためにそうした表現を用いている可能性が高い。文化というものはそもそも、自国／他国（異国）という線引きにはなじまない。そうした固執ぬきに文化を学ぶなら、教育委員会がいうような「日本人としてのアイデンティティの確立」にはつながり得ない。文化を学ぶことはむしろ反対に、「○○人としてのアイデンティティ」をほぐし、解消し、もっと広い地平に踏みだすことなのだ。

それにならず大前提として、人には自分の背負う「文化」を選び、学ぶ権利がある。私にかんしていえば、幼いころに好きになり、その「好き」を追いつづけている「本」や「小説」や「詩」の世界が、自分が最も重要とみなしている「文化」である。だからモスクワの文学大学は自分にとっては「異文化」的な環境ではまったくなかったし、私が本を読む人間だとさえわかってもらえれば、同級生からも異質な存在とはみなされず、すぐに仲間になった。もちろん言語を学ぶ必要はあったが、学べるものは学べばいいだけのことだ。私は日本にいても、B 『トム・ソーヤの冒険』も『メリー・ポピンズ』も知らないし、トルストイもユゴーもメルヴィルも読んだことも聞いたこともない」という人とはあまり会話が続く気がしないが、国際翻訳者会議などで世界の文学研究者や翻訳者に出会い、ブロークやエセーニンの話をすれば、フランスの人とも中国の人ともイスラエルの人とも容易に通じあえる。

（出典 奈倉有里『ことばの白地図を歩く 翻訳と魔法のあいだ』創元社による）

80

問一 線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 Aに入る例として、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 靴のまま家にあがるか靴を脱ぐか
イ 食事のときに箸を使うかフォークを使うか
ウ 四という数字を不吉と考えるか気にしないか
エ 洗濯物を外に干すかどうか
オ 畳に布団を敷いて寝るかベッドに寝るか

問三 Bに共通して入る言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア しかし イ あるいは ウ ところで エ たえば オ なぜなら

問四 Cに入る言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本文化 イ 消費文化 ウ 食文化 エ 外国文化 オ 縄文文化

問五 線1「警戒の姿勢をとってみよう」とありますが、なぜですか。七十字以内で説明しなさい。

問六 線2「私が大切に選びとっている」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ひとつひとつの文化は人が共通の様式を用いて理解し合うためのものだという考え方は、文化が複合化して複雑になっている現代において、その複雑さの解消を期待できるから。
イ 音楽がそうであるようにすべての文化は複合的であるという考え方は、闘争の領域へと変貌してしまった現代において、文化が本来持つ多様性に気づかせる可能性を含んでいるから。
ウ ひとつひとつの文化は肯定的なものと否定的なものとの両面があるという考え方は、混沌とした状況において日々刻々と姿を変える文化本来のあり方に気づかせてくれるから。
エ 文化が歴史の中で担ってきた意味やニュアンスを整理しようとする考え方は、合意の領域から闘争の領域へと変化しつつある現代において、互いをより深く理解する上で必要不可欠だから。
オ ひとつひとつの文化は人と人が理解し合う上で必要な共通の様式であるという考え方は、互いの違いを強調して優劣を決めたがる現代において、文化本来のあり方を取り戻すことにつながるから。

問七 線3「最初の質問」とありますが、その内容を述べた一文を抜き出し、最初の五字を答えなさい。

70

75

問八

——線4「この『国』という概念はどこからなんのためにできたのか」とありますが、筆者はなんのためだと考えていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文化を国という場所に分けることは不可能であるにもかかわらず、「異」「純粹」という枠組みを持ち出してその不可能をこまかすため。

イ 国という概念は暗黙の了解であり誰も疑わないので、七夕や三味線の大切さを無意識のうちに国民の内面に印象づけるため。

ウ 文化を国という場所に分けることは不正確であるにもかかわらず、自分の国という枠組みを強調してそれを当然のものだと思い込ませるため。

エ 「異」「純粹」という枠組みは国民にとって納得しやすいものであるので、うまく利用してその不正確さをおおいかくすため。

オ 文化を国という場所に分けることはかなり強引であるにもかかわらず、純粹な自国の文化という枠組みを出すことで文化の喪失への危機感を高めるため。

問九

——線5「国際翻訳者会議へ通じあえる」とありますが、ここには筆者のどのような考えが込められていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の大切に行っている文化をお互いに認め合うことができれば、言語の違いを意識することなく他国の人とも対話することができる。

イ 人は自分の背負うべき文化を選ぶ権利を持っており、互いの選んだ文化を基盤にすれば国をこえて理解し合える可能性が生まれる。

ウ 文化はもともと一枚岩ではないことを理解しておけば、様々な国の文学作品を理解することができるし他国の人とも通じあえる。

エ 文化を学んで国民としてのアイデンティティを解消することができれば、異文化の環境でもすぐに仲間を作ることが可能になる。

オ 自分の「好き」を大切に温めておくことで、大学でもその「好き」を追い続けていつか同じ趣味を持つ人と出会える可能性が高くなる。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（問題の都合上、省略した箇所があります。）

「能見先生、実習でのご指導、ありがとうございました」

五日間お世話になった診療所を見渡した後、聡里は深く腰を折った。能見が椅子から立ち上がり、
「おつかれさま。よく頑張ったね」と頭を下げる。

「職員のみなさんにもよろしくお伝えください」

「わかった。今日は最終日だから、岸本さんに挨拶をして帰ってもらったんだけど、なにせ遅くなったからね。他の方たちには、ほくのほうからちゃんと伝えておくよ」

「よろしくお願いします」

「駅まで送ってあげたいけど、用事があっていますぐ出なきゃならないんだ」

「大丈夫です。では先生、失礼します」

聡里はもう一度、丁寧なお辞儀をした後、バスの停留所まで歩いていった。次のバスはまだしばらく来ないので、駅まで歩くことにする。

——一年生の時は見聞きするすべてがわからないことだらけだったじゃない？ でもいまは違う。私は最終学年にもう一度、あの実習に参加することに大きな意味があるように思う。

今年の一月、綾香にそんなふうに誘われて申し込んだ実習だった。正直なところ大動物にそれほど興味があつたわけではなく、綾香につき合ってあげようか、という程度の動機だった。それなのにいまは実習が終わってしまったことが心底寂しい。実習後、夕焼けを眺めながらこの道を歩くのも今日で最後かと思うと、引き返したくなるような思いだった。

実習が無事に終わった。私は完走できたんだ、と聡里は暮れ始めた空を見上げる。

実習の最初の頃におぼえた不思議な感じの正体は、日を重ねるにつれて徐々に輪郭をはっきりとさせてきた。

飼い主と獣医師の関係が、伴侶動物と大動物とは違うような感じがしていた。その理由が実習を終えたいまはわかる。

¹大動物の獣医師は、動物の生命の、その背後にある人の生命をも守っている。

実習中の車の中で、「冬はどうやって回診するんですか」と能見に訊いたことがあつた。ほとんどの農場は山手にあるから、冬の間は雪に埋もれる。冬季は休業するんですか、といま思えば恥ずかしいくらい間の抜けた質問をした。

聡里の問いかけに、能見は「変わらないよ」と答えた。

雪が積もうと、雨が降ろうと、動物たちは生きている。動物たちが生き続ける限り、農家の人たちは世話をする。だから自分たちも仕事をやる。「新聞配達の人雪だからって休まないのと同じだよ。警報レベルの大雨や台風の時はさすがに臨時休業だけど」と能見は気負いなく笑った。

夜が迫っていることを感じながら、聡里は晴れやかな気分ですら向かって歩き続ける。道の両側に広がる草地の樹々や花々が薄暮れの青い空気に包まれ、この時間にしか見られない幻想的な景色を作り出している。

立ち止まり、目の前に広がる風景を携帯のカメラに収めた。聡里の目には青っぽい灰色に映る景色がレンズを通すと淡い紫色のように見える。あまりにもきれいな写真が撮れたので、誰かに送りたいと思う。

画面に置いた指がどうしようかと迷っていると、携帯が震えた。

『夏のウトナイ湖は渡り鳥の観察に最適です。いま目の前をコチドリが飛んでいました』

LINEの画面を開くと、残雪からメッセージが届いていた。文章の後に、背が茶色い、スズメのような小鳥の画像も送られてきた。残雪は鳥の研究施設に絞って就職活動をしていて、この夏休み中に関心のある所をいくつか回っているようだった。

聡里はいま撮った薄暮れの写真を、残雪に送り返した。『実習、完走しました。楽しかったです』と短く添えておく。これだけで彼はきつと、いまの聡里の気持ちをわかってくれる。

（中略）

ペットボトルを持って駅の待合室に戻ろうとしたその時だった。

「よかった！ 間に合ったわあ」

小さく叫ぶ声が聞こえた。聞き覚えのある声だったので後ろを振り返ると、運転席から美和が降りてくるのが見えた。助手席に座っていた勝喜も、足を庇いながら車を降りようとしている。

「……折原さん？」

駅から折原農場までだと車でも一時間以上はかかるはずだ。それなのに偶然出会うなんて、驚愕の表情のまま夫妻を見つめ

る。

「診療所に寄ったら能見先生がいて、『岸本さんなら駅に向かっていますよ』って教えてくれたのよ。だから急いで来たの」
美和が言っていることの意味がよくわからず、聡里は首を傾げた。勝喜は杖をつきながら、こっちに向かってゆつくりと歩いてくる。

「これ、よかったら持って行きんさい。お腹が空いたら食べてちょうだい」

美和がクリーム色の紙袋を聡里の前に差し出した。受け取った紙袋はずしりと重い。

「私が作ったお弁当。あと、うちの畑で採れたハスカップも入れてあるから」

ハスカップはブルーベリーに似た果物で、聡里は北海道に来るまで見たことも食べたこともなかった。酸味が強く、でもそれを打ち消す甘味があり後味がさっぱりしている。

「ありがとうございます。……でもどうして私に？」

「したって、手伝ってくれたから」

「それは実習で……」

思いがけない親切に出会うと、どうお礼を伝えればいいかわからない時がある。たった二回、実習で訪れただけなのに、夏の海水のような温かさが心に満ちていく。

「学生さん、頑張りなさいよ」

勝喜が聡里に笑いかけてくる。

「お父さん、『学生さん』じゃなくて『岸本さん』。ちゃんと名前と呼んでくださいな。ごめんなさいね、うちの人、なかなか名前覚えられなくて」

呆れ顔でため息をついた後、美和が「頑張つてね」と同じ言葉をくれる。

「そうそう。今日生まれた仔牛の名前、『サト』にしたのよ。岸本さんの名前から二文字もらって」

「私の名前から……ですか」

でも肉牛は三歳までしか生かされないのでは、と返答に困る。生後八カ月で出荷され、その後は肥育農家で大きく育てられてから枝肉にされる。「サト」の運命を思うと、喜んでいいのかわからない。

「安心してねえ、サトは母牛として育てようと思ってるから。ねえ、お父さん」

「ああ。マイコとミドリと一緒に、手元に置いておくつもりだよ」

サトは平均より五キロも大きく生まれた。そのせいで難産にはなったけれど乳はよく飲むし、毛艶もいい。きっと健康な母牛になるに違いないと、勝喜が満足そうに頷いた。

去っていく軽トラを見送った後、聡里は駅舎の中に戻った。列車の時刻が迫り、さつきまで誰もいなかった駅舎に人が増えている。置きっぱなしにしていたスニーカーが元の場所にあるのを見て、ほっと胸を撫でおろす。

列車は空いていて、聡里は車両の先頭の二人掛けの席に腰を下ろした。窓際に座ってすぐに曲げわっぱの弁当箱を紙袋から取り出し、膝に載せる。

「わ……」

弁当箱の蓋を開けると、餡色のイカ飯がぎっしりと詰まっていた。イカ飯の横には行者にんくの醤油漬が添えられている。箸を手に口に運ぶと、目尻から一筋、涙が零れた。

イカのうま味が染み込んだ餅米を噛み締めていると、さらに涙が溢れてくる。聡里は一口、一口、ゆつくりと弁当を食べた。

誰かが自分のために作ってくれた弁当を食べるのは、高校生の時以来だ。チドリが毎日作ってくれる弁当は豪華ではなかったけれど、健康を考えた手の込んだものだった。

泣くと鼻が詰まってせつかくの味がわからなくなるので、いったん食べるのをやめて涙が止まるのを待つ。涙を拭いて、はなを cand、もう一度蓋を開ける。だし汁と醤油と酒とみりんで味付けされたイカ飯の味が、喉の奥までじわりと染み込んでいく。

窓に映る自分の顔を見ながら弁当を食べていると、今日生まれた仔牛の顔が頭に浮かんだ。サトと名付けられた仔牛は、これから大きく育つだろう。成牛になるまでには病気に罹ることがあるかもしれない。でも病気に罹ったら獣医師が手当をしてくれる。

私も仔牛の成長を見たいなと、思う。今日生まれた仔牛がやがて母牛となり、また新しい生命を生み出す。その生命の循環に自分も獣医師として関わっていけたら、と。

大動物の獣医師の仕事は、誰かの人生とともにある。自分の存在が誰かの暮らしの一部になる。そんな思いを持って働いたら、きっと幸せだろう。

駅の駐車場で折原夫妻と別れの挨拶をしている時、勝喜に、「学生さんは、将来は牛の医者になるのかい？」と訊かれた。実習初日にも同じ質問をされたが、すっかり忘れていたようだった。一度目の時は、なにも返さなかった。でも二度目の問いかけには、きちんと答えた。「はい、大動物の獣医師になるつもりです」ほとんど迷うことなく口をついたその一言は、誰よりも自分自身を驚かせ、でもそう口にした瞬間、始めから決まっていたような気持ちになった。

(出典 藤岡陽子『リラの花咲くけものみち』光文社による)

6

問一 線①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 線 a・b の語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 間の抜けた		b 気負いなく	
ア	くだらない	イ	意気込むことなく
	イ 核心をつく		イ 気にする様子もなく
	ウ 掘り下げた		ウ 負担に感じることなく
	エ 期待を裏切る		エ 不快感を隠すことなく
オ	見当はずれの	オ	ふざけることなく

問三 線1「大動物の獣医師は、生命をも守っている」とありますが、同じ内容を説明した箇所を本文中から二十三字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問四

線2「彼はきつと、いまの聡里の気持ちをはわってくれる」とありますが、このときの聡里の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が無事に実習を終えた嬉しさと悲しさを長文で伝えたいと本音では思っていることを、残雪は見抜くだろうと予想している。
- イ 実習を楽しめたことを短い文面と写真で報告するだけで、今すぐにでも会いたいという自分の望みを残雪はかなえてくれると信じている。
- ウ 短い文面と写真を通して、実習中でも自分は残雪のことを気にかけていたことを彼にわかってほしいと切実に思っている。
- エ 短い文面と写真だけで、残雪ならば自分が実習を無事にやりきり、爽快感と達成感に満たされていることを理解してくれると確信している。
- オ 短い文面と写真からでも、残雪は自分が実習を無事にやりきり成長したということに気づいてくれるだろうと思っている。

問五 — 線3「急いで来たの」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 聡里が駅に向かってしていると能見から聞き、追いかけて行って仔牛に聡里にちなんだ名前をつけたことをどうしても伝えたいと思ったから。
- イ 聡里が駅に向かって知っていることを知り、車内で聡里が一人で寂しい思いをしないように手作り弁当とハスカップを渡すことを思いついたから。
- ウ 聡里が駅に向かってしていると能見から聞き、手伝ってくれた聡里に手作り弁当とハスカップを電車が出る前になんとか渡したと思ったから。
- エ 聡里が実習を終えたと知り、手伝ってくれたお礼として弁当を作ることを思いつき、それを渡して喜ぶ顔を見たいと思ったから。
- オ 聡里が実習を終えたのに能見は駅まで送らなかったと知り、追いかけて行って車に乗せ車内で食事してもらおうと考えたから。

問六 — 線4「私の名前から……ですか」とありますが、このときの聡里の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 三歳までしか生きられない仔牛に聡里にちなんだ名前を折原夫妻がつけたと知り、驚くとともに照れくさく思っている。
- イ 仔牛は三歳までしか生きられないのに聡里にちなんだ名前を折原夫妻がつけたと聞き、素直に喜んでいいのか分からずにいる。
- ウ 折原夫妻が三歳までしか生きられないから仔牛に聡里にちなんだ名前をつけたことに対して、複雑な気持ちになっている。
- エ 生まれた仔牛に聡里にちなんだ名前を折原夫妻がつけたことによって、仔牛の運命が変わったことを受け入れられないでいる。
- オ 今日生まれた仔牛に聡里にちなんだ名前を折原夫妻がつけたと知り、無断で名前を使われたことに戸惑いを覚えている。

問七 — 線5「箸を手口に運ぶと、目尻から一筋、涙が零れた」とありますが、このときの聡里の気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問八——線6「始めから決まっていたような気持ちになった」とありますが、このときの聡里の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 実習初日には何も返すことができなかった質問に今度は迷うことなく返答できたことで、実習の苦労を思い出すとともに、自分自身の成長を実感している。
- イ 今日生まれた仔牛がやがて母牛となり、また新しい命を生み出すその尊さに、身の引き締まる思いをしつつ大動物の獣医師になる決意を新たにしている。
- ウ 自身の発言には驚いたが、口に出したことで大動物の獣医師になりたいという意志が自分の内にあったことが自覚され、大動物の獣医師になれるようにがんばろうと思っている。
- エ 勝喜が実習初日と同じ質問をしてきたことで聡里が大動物の獣医師になるものだと思われていたことを知り、なぜそのような誤解が生じたのか疑問に思っている。
- オ 大動物の獣医師になるつもりだとはっきり口にした自分に驚いたが、発言によりそれが自分の天職だと気づき、その偶然の出会いに喜びを隠せないでいる。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題の都合上、一部表記を変えた部分があります。)

禪師弘済は、百済国の人なり。百済の乱の時に当りて、備後国三谷郡の大領の先祖、百済を救はむが為に軍旅に遣さるる時に、誓願を發して申さく「もし平らかに還らば、諸の神祇の為に伽藍を造り立て多くの寺を起らむ」とまうす。遂に災難を免れ、すなはち禪師を請へて相共に還り三谷寺を造る。其の禪師の伽藍と諸の寺とを造り立てたる所以なり。道俗覩て、共に為に敬ふ。禪師尊き像を造らむが為に、京に上り財を売る。既に金と丹とのごとき物を買ひ得て、難波の津に還り到る。時に海の辺の人大きなる亀四口を売る。禪師人に勧へて買ひて放たしむ。すなはち人の舟を借り、童子二人をゐて共に乗りて海を渡る。日暮れ夜更けて舟人欲を起し、備前の骨嶋の辺に到りて、童子等を取りて海の中に投げ入る。然うして後に禪師に告げて云はく「速やかに海に入るべし」といふ。師教化ふといへども賊なほ許さず。ここに願を發して海の中に入る。水腰に及ぶ時に石を以ちて脚に當つ。其の暁に見れば、亀負へり。其の備中の浦にして、海の辺に其の亀三たび領きて去る。是れ放てる亀の恩を報ゆるかと疑ふ。

(施主)

時に賊等六人、其の寺に金と丹とを売る。檀越まづ量るに価を過ゆ。禪師後に出でて見れば、賊等忙然しくして退進を知らず。

禪師憐れびて刑罰を加へず。仏を造り塔を厳り、供養し已りぬ。後に海の辺に住みて往き来る人を化ふ。春秋八十有余のとしに死

ぬ。畜生すらなほ恩を忘れず、返りて恩を報ゆ。何にいはむや、人にして恩を忘れむや。

（『日本靈異記』による）

問一 ―― 線 a「まうす」・ b「すなはち」・ c「あて」を現代仮名づかいによる表記に書き改めなさい。

問二 ―― 線 1「もし平らかに還らば」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア もし百済を平定して帰るならば

イ もし無事に帰れるならば

ウ もし平和な時代に戻るならば

エ もし平らな道に戻るならば

オ もし平穏な暮らしを求めるならば

問三 ―― 線 2「速やかに海に入るべし」とありますが、なぜ舟人はそう言ったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 舟を岸に着けにくい場所だったので、歩いて上陸させようと考えたから。

イ 海に入った禅師が、仏の力で救われるところを見てみたいと思ったから。

ウ 誤って海に落ちた童子を、禅師の力で助けてもらおうと思ったから。

エ 禅師を舟から追い出し、持っていた財をすべて奪おうと考えたから。

オ 舟が賊に襲われて、とにかく禅師だけでも無事に逃がそうと考えたから。

問四 ―― 線 3「石」とありますが、本当は何でしたか。本文中から漢字一字で抜き出して答えなさい。

問五 ―― 線 4「賊等忙然しくして退進を知らず」とありますが、なぜこのような状態になったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 売りに来た金と丹の値段が信じられないくらい高くて動揺したから。

イ もう会うこともないと思っていた禅師が現れてとても驚いたから。

ウ 禅師に売った亀がじつは仏の化身だったと知り後悔したから。

エ 禅師を助けたことでこれまでの罪が許されたことに感激したから。

オ 禅師が亀のように長寿であることを知り恐ろしくなったから。

問六 ―― 線 5「春秋」の文中における意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 季節 イ 時間 ウ 年齢 エ 気候 オ 方角

問七 本文の主旨として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人を信じればいいことがある。

イ 仏を信仰するとご利益がある。

ウ すべての命には同じ価値がある。

エ 思い切って行動することが大切だ。

オ 恩に報いることを忘れてはいけない。

問二

問三

問四

問六

問八

問九

a
b

問三

問四

問五

問六

問八

問二

問三

問四

問五

問六

問七

